

星のや軽井沢・ピッキオビジターセンターに対する

JHEP 認証審査レポート(概要版)

2026 年 9 月



星のや軽井沢・ピッキオビジターセンターに対する
JHEP 認証審査レポート

評価申請者

名称 星野リゾート・リート投資法人（執行役員 秋本 憲二）
住所 東京都中央区銀座一丁目 10 番 6 号

名称 株式会社星野リゾート・アセットマネジメント（代表取締役社長 秋本 憲二）
住所 東京都中央区銀座一丁目 10 番 6 号

申請番号

1-4617101-2601

評価実施者

名称 公益財団法人日本生態系協会（会長 池谷 奉文）
住所 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

ハビタット評価認証制度 JHEP

JHEP（ジェイヘップ）は、米国連邦政府が開発した HEP という環境評価手法を、当協会が日本で適用可能な形に改良し、2008 年に創設したもので、事業を実施する前よりも生物の多様性の価値が向上した取り組みを、定量的に評価、認証する日本唯一の認証制度です。

自然の生態系は現代世代及び将来世代のもっとも大切な生存基盤です。その生態系の構成要素である生物の多様性は、私たちにとって遺伝子資源としても、なくてはならない基本財産です。その生物の多様性の価値がこれまで、漠然としたイメージで取り扱われてきました。

JHEP により、「動物のすみやすさ（HSI）」、「植生の地域らしさ（VEI）」という 2 つの指標を用いて数値化し、事業の前後を比較することで、生物の多様性の保全や再生の効果を明確に示すことが可能となりました。本認証は世界レベルの厳しい基準によるもので、消極的な環境への“配慮”では取得困難です。それだけに、認証を取得した取り組みは、社会に大きく貢献すると共に、世界へ発信可能な事業であると言えます。

目次

I. 評価の概要	1
II. 評価区域と基準年.....	4
1. 評価区域	4
2. 基準年	5
III. 事業内容	6
1. 事業の概要	6
2. 緑地割合	11
IV. 評価結果	12
1. 保全再生目標等の設定.....	12
2. 植栽植物等の確認（要件 3 の確認）	20
3. 評価基準値の算出.....	21
4. 事業によるハビタット得点の算出.....	25
5. 申請年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）	29
6. 評価値（要件 1 の確認）	30
V. 審査結果	33

I. 評価の概要

申請番号 1-4617101-2601

評価対象事業

名称 星のや軽井沢・ピッキオビジターセンター
 所在地 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 2148 番 5 他
 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 2157 番 200 他
 面積 4.57ha（ピッキオビジターセンターを含む）
 概要 宿泊施設、自然体験・保全拠点の維持管理

事業実施者

名称 星野リゾート・リート投資法人（執行役員 秋本 憲二）
 住所 東京都中央区銀座一丁目 10 番 6 号

名称 株式会社星野リゾート・アセットマネジメント
 （代表取締役社長 秋本 憲二）
 住所 東京都中央区銀座一丁目 10 番 6 号
 問合窓口 サステナビリティ推進室
 アドレス hrr_asset_management@hoshinoresort-am.com

認証タイプ ハビタット評価認証 ver.3.0（JHEP ver.3.0）
 基準年 2013 年
 申請年 2026 年
 緑化条件 総敷地面積の 20%以上が緑地となる。
 将来における緑地割合 68.3%
 目標植生* オニヒョウタンボクーハルニレ群集
 評価種 ニホンリス／シロハラ／シジュウカラ／コムスジ

*目標植生および評価種の位置づけ

目標植生および評価種は、事業前後のハビタットのポテンシャルを比較するために設定されたものであり、特定種の個体数増加や特定植生の形成を義務付けるものではない。

評価結果

要件 1	事業で得られる年平均ハビタット得点が評価基準値以上となる。
評価基準値	12.3 点 (得点範囲：0～100 点)
年平均ハビタット得点の増減	2.9 点 (得点範囲：－100～＋100 点)
要件 2	ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。
50 年後のハビタット得点	16.2 点 (得点範囲：0～100 点)
要件 3	生態系被害防止外来種を使用しない。
	使用なし

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク A

総評

今回の認証では、浅間山麓の豊かな自然環境に囲まれた広大な敷地において、地域本来の植物や水系と調和した整備を行い、生態系ネットワークの保全・再生に向けた重要な拠点として機能させている取り組みが確認されました。「谷の集落に滞在する」というコンセプトのもと、星のや軽井沢エリアでは樹高 10m を超えるトチノキやミズナラ等の多種多様な中高木類が配され、ピッキオビジターセンターエリアにおいてもウワミズザクラ等を含む高木層から低木層までの豊かな階層構造が維持されており、A ランクの認証基準を十分に満たしていると認められました。

事前協議での決定の通り、今後の管理方針については低木・中高木ともに高さ制限を設けず、自然な樹形を活かして大きく成長させていく計画としており、これにより動物評価種のハビタット適性（HSI）および評価値のさらなる向上が期待される良好な計画内容となっています。今後、補植等を行う際は高いハビタットの質（VEI）を維持するため、引き続き地域性の在来種を選定されることを推奨します。

多様な自然環境の再生と気候変動への対策が最大の課題となっている現在、本事業は当該地域の生態系ネットワークの拠点としてさらに重要性が増し、自然と共存する美しいまちづくりの先進事例となっています。世界的に ESG 経営や SDGs、ネイチャーポジティブ実現に向けた取り組みが求められる現代、持続可能な経済・社会の実現に向け、企業の果たすべき役割は、かつてないほど注目されています。今後も生物の多様性を重視した取り組みが継続、発展されていくことが期待されます。

ガイドライン

ハビタット評価認証制度 考え方と基準 ver.3.0

評価認証機関

公益財団法人日本生態系協会

電話番号 03-5951-0244

認証日 2026 年 9 月 29 日

有効期限 2031 年 9 月 28 日

認証番号 1-4617101-2601/00

Ⅱ. 評価区域と基準年

1. 評価区域

長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉 2148 番に位置し、評価区域の面積は約 4.57ha である（下図の赤色部）。

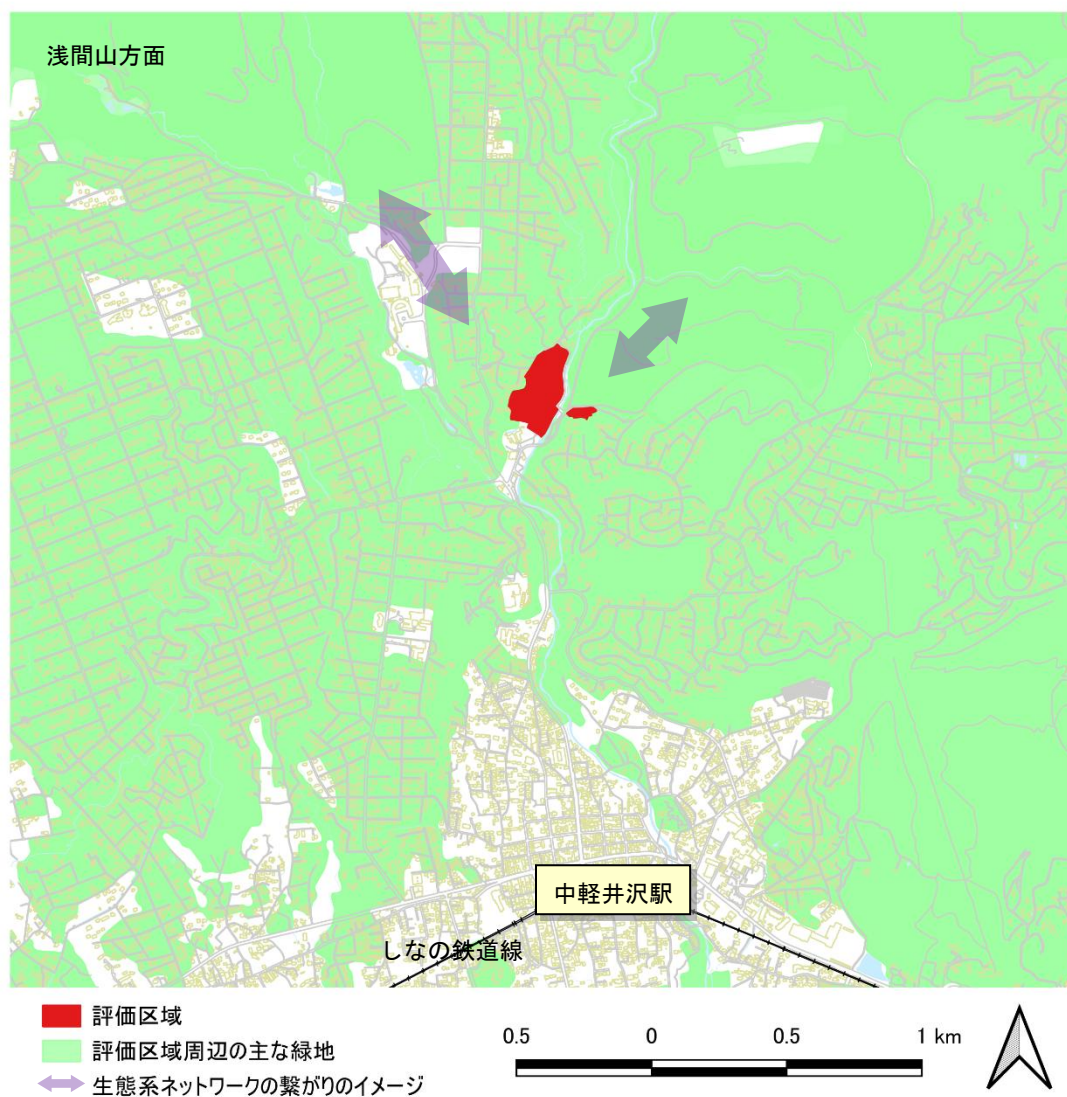


図. 評価区域

（国土地理院発行の基盤地図情報 25000 および国土数値情報をもとに作成）

2.基準年

基準年は、事業者が信託受益権を取得した 2013 年とする。

Ⅲ. 事業内容

1. 事業の概要

対象地は、JR 軽井沢駅から北西約 4km、浅間山麓の自然豊かな軽井沢町長倉星野エリアに位置する。1914 年に創業した前身の「星野温泉旅館」を経て、2002 年より大規模な再開発に着手し、2005 年に「谷の集落に滞在する」をコンセプトとした宿泊施設「星のや軽井沢」が開業した。また、隣接する池沼は野鳥観察やスケートリンク（冬季）等として長年親しまれてきたが、自然環境の保全と活用の再整備を経て「ピッキオビジターセンター」として一体的に維持管理されている。

「浅間山麓の豊かな自然と共生する集落」をデザインコンセプトとし、豊かな水資源と地域固有の生態系を再生・保全することが目標とされている。集落内を流れる湯川の水と高低差を生かした棚田や水庭、水路を配置し、谷の地形に沿うように客室群が配されている。敷地内にはハルニレやミズナラをはじめとする地域固有の樹種を中心に植栽・保全され、浅間山麓本来の豊かな動植物が息づく環境が再生されている。

また、環境への取り組みとして、敷地内を流れる集水域の水資源を活用した小水力発電、温泉排熱、地熱の 3 エネルギーを利用したシステムを導入し、施設内で使用するエネルギーにも活用している。さらに、専門ガイド「ピッキオ」によるネイチャーツアーや動植物の調査・モニタリング等を通じ、生物多様性の保全と観光を両立させた持続可能なエコツーリズムおよび景観・保全管理が実践されている。

樹木については一律に整枝・剪定を行うのではなく、低木・中高木ともに高さ制限を設けずに成長させていくものとして、植栽管理にあたっていくものとしている。

名称	星のや軽井沢・ピッキオビジターセンター
敷地面積	79,784.52 m ² （星野リゾート・リート投資法人所有分）
延床面積	約 11,723.61 m ² （星野リゾート・リート投資法人所有分）
構造・階数	鉄筋コンクリート・鉄骨造ステンレス鋼板・合金メッキ鋼板葺 地下 1 階付 2 階建、木造合金メッキ鋼板ぶき平家建て
用途	宿泊施設（旅館）、自然体験・保全施設（ビジターセンター・池沼）
着工・竣工	星のや軽井沢 2003 年着工、2005 年竣工 ピッキオビジターセンター 2015 年着工、2016 年竣工
環境対策	小水力発電、温泉排熱、地熱エネルギー利用（自給エネルギー率向上） 水生生態系および地域固有動植物の保全・定量的モニタリング ピッキオと連携したエコツーリズムの展開



図. 豊かな樹林に囲まれた集落景観(提供資料)

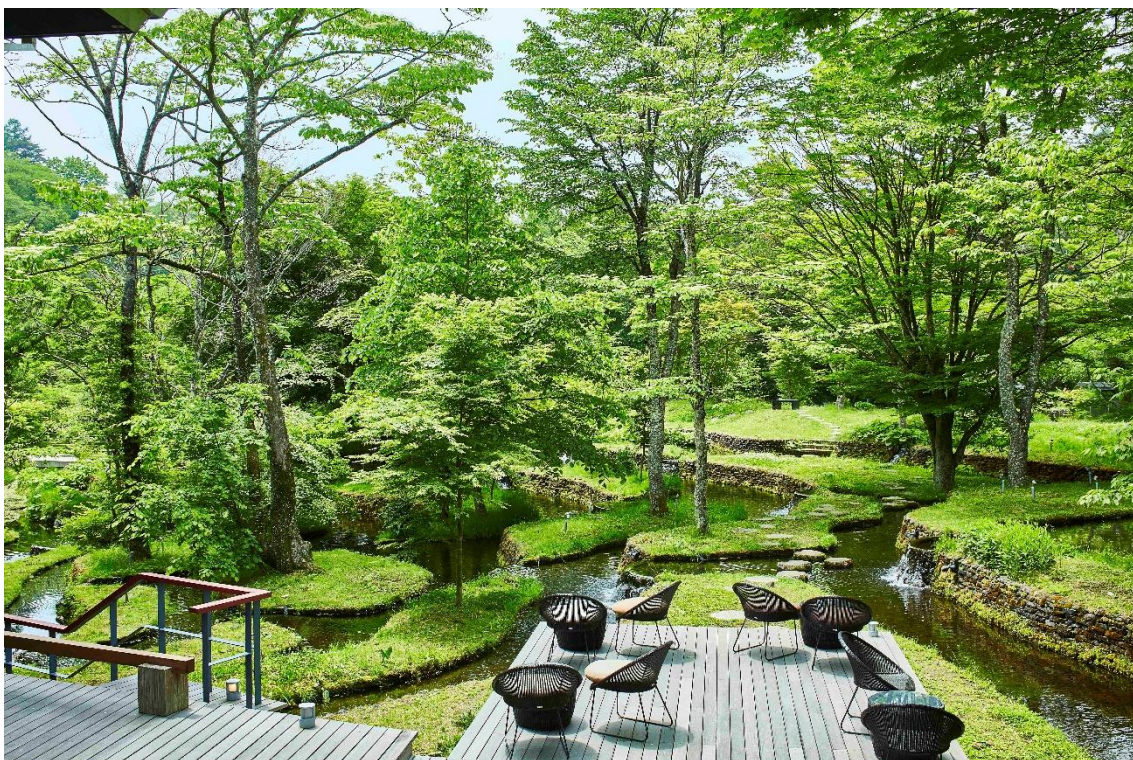


図. 地域の自然と調和した棚田状の水辺と樹林(提供資料)

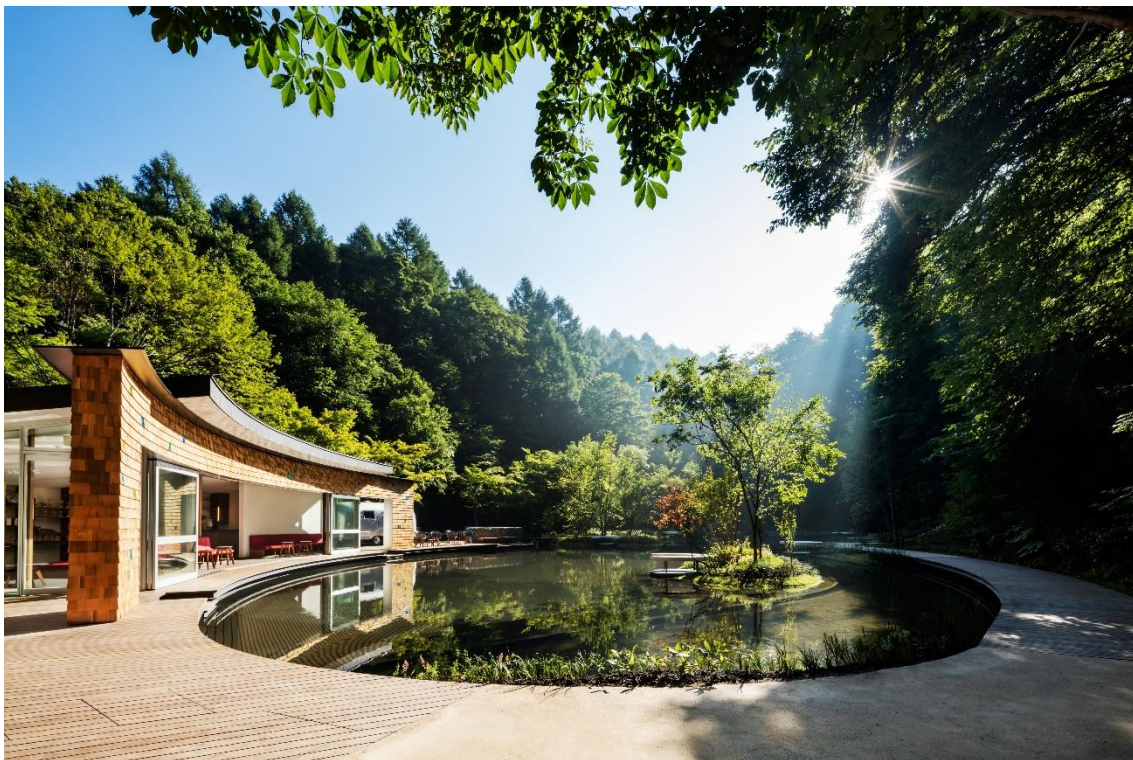


図. 自然環境の保全と活用を図るピッキオビジターセンター(提供資料:2026 年 7 月撮影)



図. 池周囲の豊かな水辺植生(提供資料:2026 年 7 月撮影)

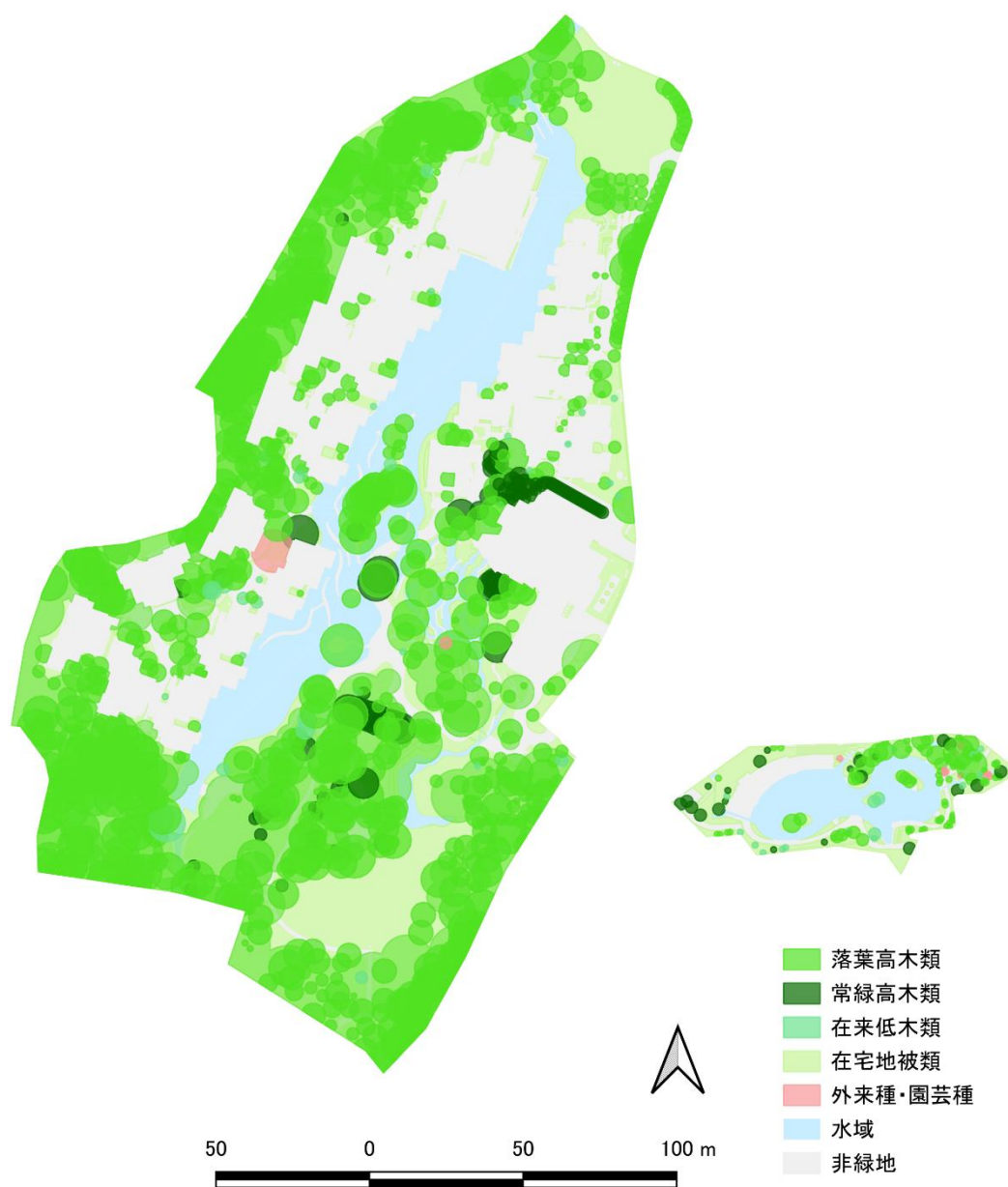


図. 2026 年（申請年）における植生等の分布

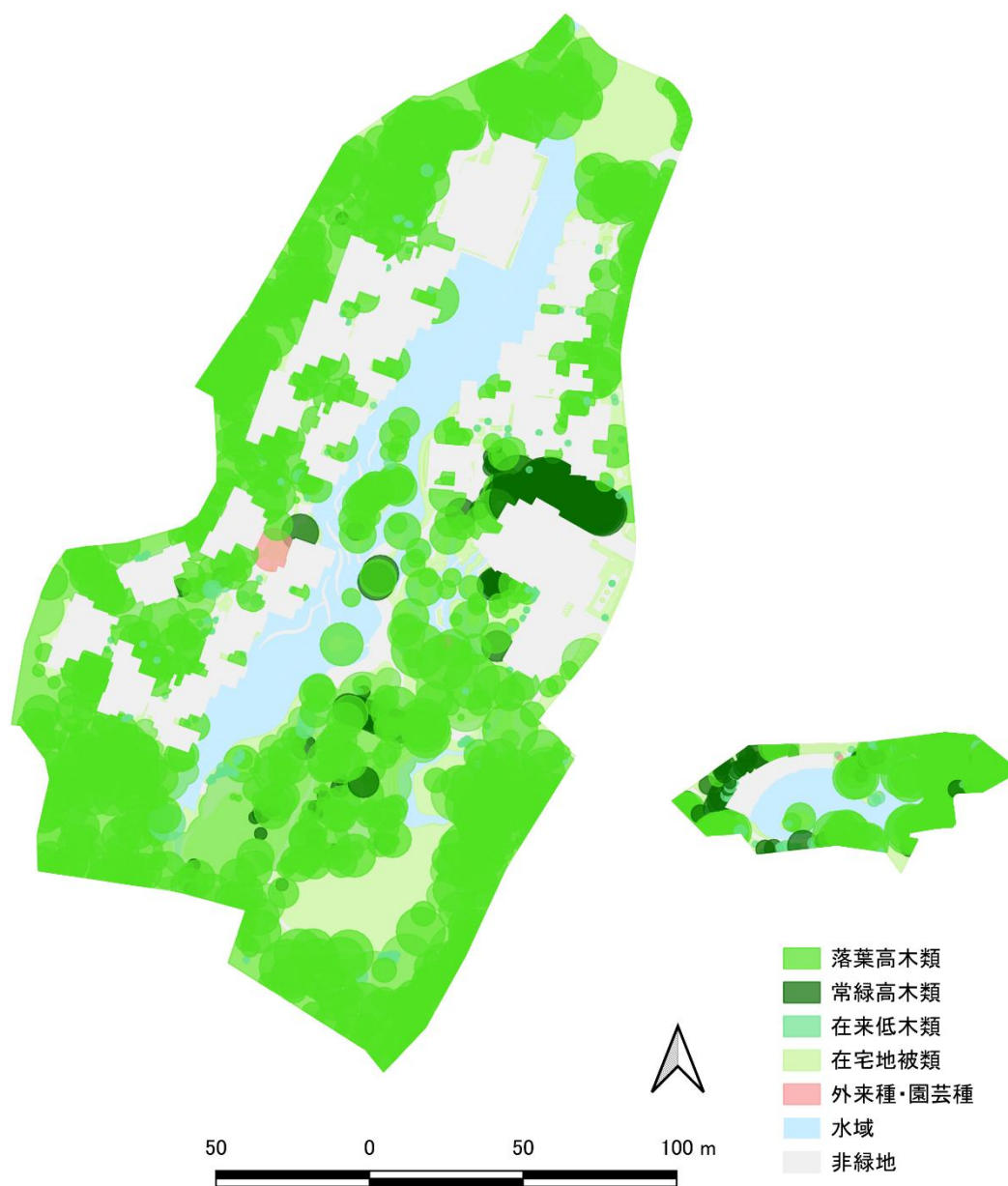


図. 2076 年（申請年の 50 年後）における植生等の分布

2.緑地割合

JHEP の定義に従った当該評価区域の緑地割合は 68.3%であり、JHEP 認証に関する緑化条件は満たされている。

IV. 評価結果

1. 保全再生目標等の設定

1-1. 保全再生目標

植生については、評価対象地において成立しうる自然植生の系列に基づいた自然植生の保全・再生を目標とする。動物に関しては、評価区域の立地条件および設定された目標植生に生息し、希少性や固有性、栄養段階などの高い種や人為影響を受けやすい種などを中心として保全を図ることを目標とする。

1-2. 基準年の状況

基準年（2013 年）から過去 30 年間（1983 年～2013 年）のハビタットの状況を、ヒアリングおよび複数年代の空中写真を用いて把握した。

その結果、1980 年代から 1990 年代においては、前身である「星野温泉旅館」の建物群や池・湯川沿いの施設が点在し、敷地周辺には浅間山麓特有の落葉広葉樹林を中心とする森林環境が広がっていた。その後、2000 年代初頭（2002 年～2005 年）にかけて「星のや軽井沢」への大規模な再開発・景観整備が実施され、集落構造の再編とともに湯川や池を中心とする水辺環境および周辺植栽の再生が行われた。2005 年の開業以降、2013 年の運用開始（基準年）に至るまでの間、適切な景観・自然環境管理のもとで植生の発達・定着が進められた。

以上より、基準年から過去 30 年間では、再開発後の自然回復・維持管理を経て植生が安定的に成熟した基準年（2013 年）が最も植生の成熟した状態にあったと推察された。従って、目標植生は、基準年の遷移段階に従って設定することとした。



図. 2000 年時点の空中写真（国土地理院撮影、赤枠：評価区域）

1-3.環境タイプの分布状況

JHEP では「環境タイプ」という概念を設けている。環境タイプは、ランクの高い順に「1. 湿性環境、樹林」－「2. 低木・草地・竹林」－「3. 人工地」と定義している。対象地内を環境タイプで区分し、単位区画ごとに、原則として基準年以前の30年間と初回申請年以前の30年間が重なる期間（環境タイプ設定期間）における環境タイプの変遷を確認する。その期間で最も高いランクの環境タイプを、その単位区画における基準年以前の環境タイプとしている。

1-2における基準年（2013年）前後の空中写真判読の結果、環境タイプ1、3のタイプが確認された。基準年以前で最も高い環境タイプの面積割合は、樹林タイプ1（湿性環境、樹林）が73%、環境タイプ3（人工地）が27%であった。



図. 基準年以前における環境タイプの分布

1-4. 自然植生の遷移系列

軽井沢町の地形は、長野県東部、浅間山の南麓に位置する標高 900～1,000m 程度の高原地帯からなっている。この地域は信濃川水系（千曲川）の集水域に属し、浅間山の火山噴出物が厚く堆積した冷涼かつ湿潤な内陸性気候下に位置している。

長野県浅間山麓のこうした条件下における潜在自然植生は、オニヒョウタンボク－ハルニレ群集と判断される。本地域のような内陸部の標高 900m 以高に位置するブナクラス域に発達する盆地及び山麓に広がる沖積地には、高木層にハルニレの優占する山地湿生林が生育している。特に、浅間山南東山麓に位置する長野県軽井沢近郊の微細なローム質の黒色火山噴出物の堆積した比較的湿潤な立地にはオニヒョウタンボク－ハルニレ群集が生育している（宮脇（編）1985[†]）。

ハルニレは初期の樹高成長が速い先駆的性質と、林陰下でも耐えうる極相的性質の双方を兼ね備えている（今・沖津 1995[‡]）。過湿地や河畔部において地表攪乱が発生すると、ヤナギ類などを主体とする先駆的樹林が成立する。ハルニレの種子は草本層が密生する場所では定着できずに枯死してしまうため、洪水等の草本類が抑制されるが樹木は倒れずに林冠は残るような適度な攪乱が発生した際に、適度な湿潤さが保たれた先駆樹林下の砂質堆積地に侵入・定着する。先駆樹林の下層で定着・成長したハルニレが高木層へと達し、やがて寿命の短い先駆樹種が淘汰・欠落することで、最終的にハルニレが優占する極相林が形成される（只木ほか 1988[§], 和田・菊池 2004^{**}）。

以上より、ハルニレ林の形成過程においては、一般的な広葉樹二次林や二次草原に相当する段階は挟まれない可能性が高い。二次的要素を捉えるならば、先駆的樹林（ヤナギなど）にハルニレが混生・侵入していく段階が、ハルニレ林における先駆的・二次的段階に該当すると考えられる。また、定着後も地表攪乱が生じた際に、ハルニレ林内でハルニレ自身が再び定着・更新を繰り返すのも本群集の大きな特徴である（只木ほか 1988, 和田・菊池 2004）。

[†] 宮脇昭（編）（1985）日本植生誌 6 中部．至文堂，東京．

[‡] 今博計・沖津進（1995）浅間山麓と戸隠山麓に分布するハルニレ林の構造と更新．千葉大学園芸学部学術報告，49，99-110．

[§] 只木良也・宅見啓・中根穂高（1988）上高地、とくに焼岳周辺における生態遷移 III 遷移系列の考察．信州大学理学部紀要 23(1)，47-60．

^{**} 和田直也・菊池多賀夫（2004）上高地梓川氾濫原におけるハルニレ実生の発生と定着．植生学会誌 21(1)，27-38．

以上を下表に整理した。

表. 自然植生に至る遷移系列の推定

遷移段階	群集名	環境タイプ
極相林	ハルニレ群集	樹林タイプ
先駆的二次林	ヤナギ林	

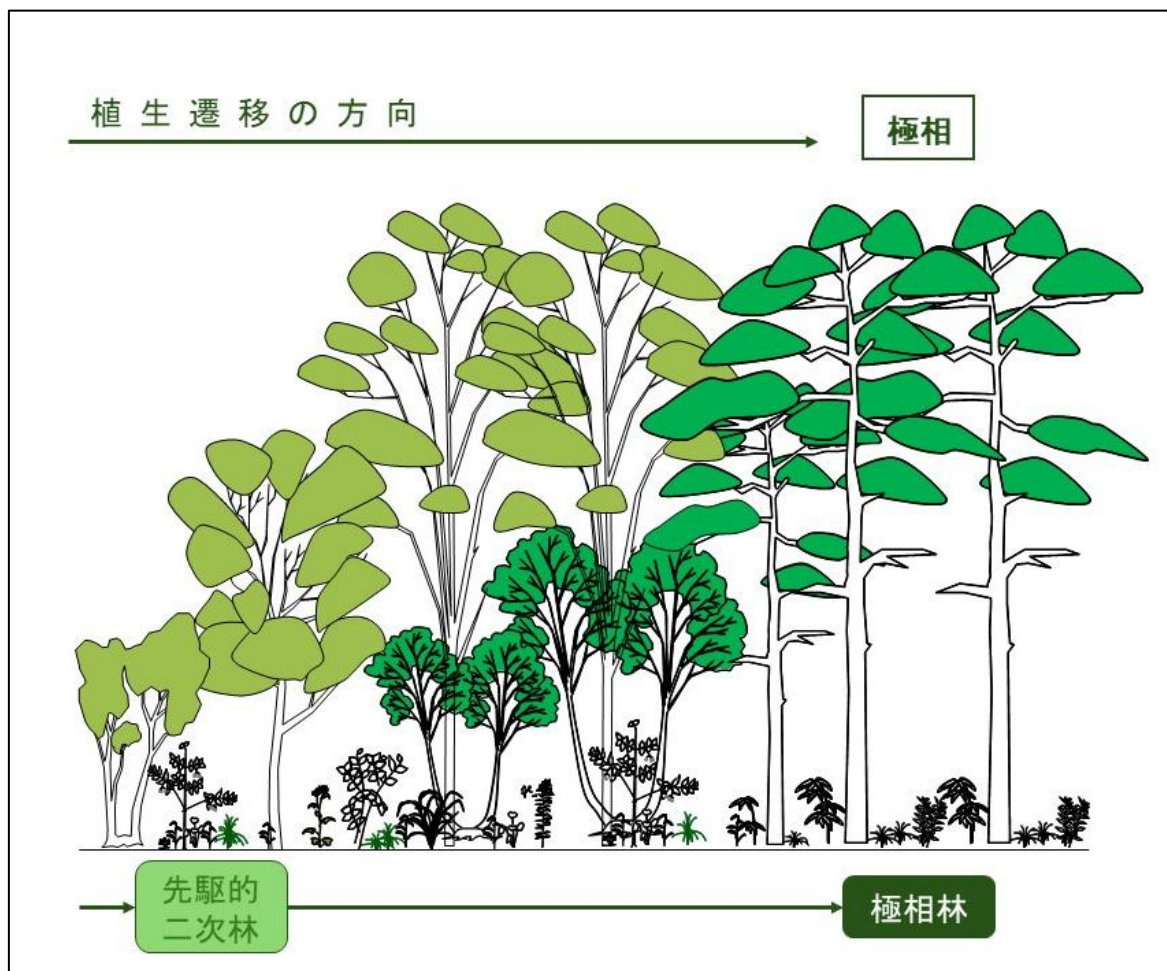


図. 目標植生の遷移段階イメージ

1-5.目標植生

環境タイプの分析より、本事業において目標とする植生群集と面積は、樹林タイプとしてオニヒョウタンボク-ハルニレ群集を 30589 m²と設定した。残りは、水域、建物や駐車場などの非緑地である。

目標植生の分布を下図に示した。

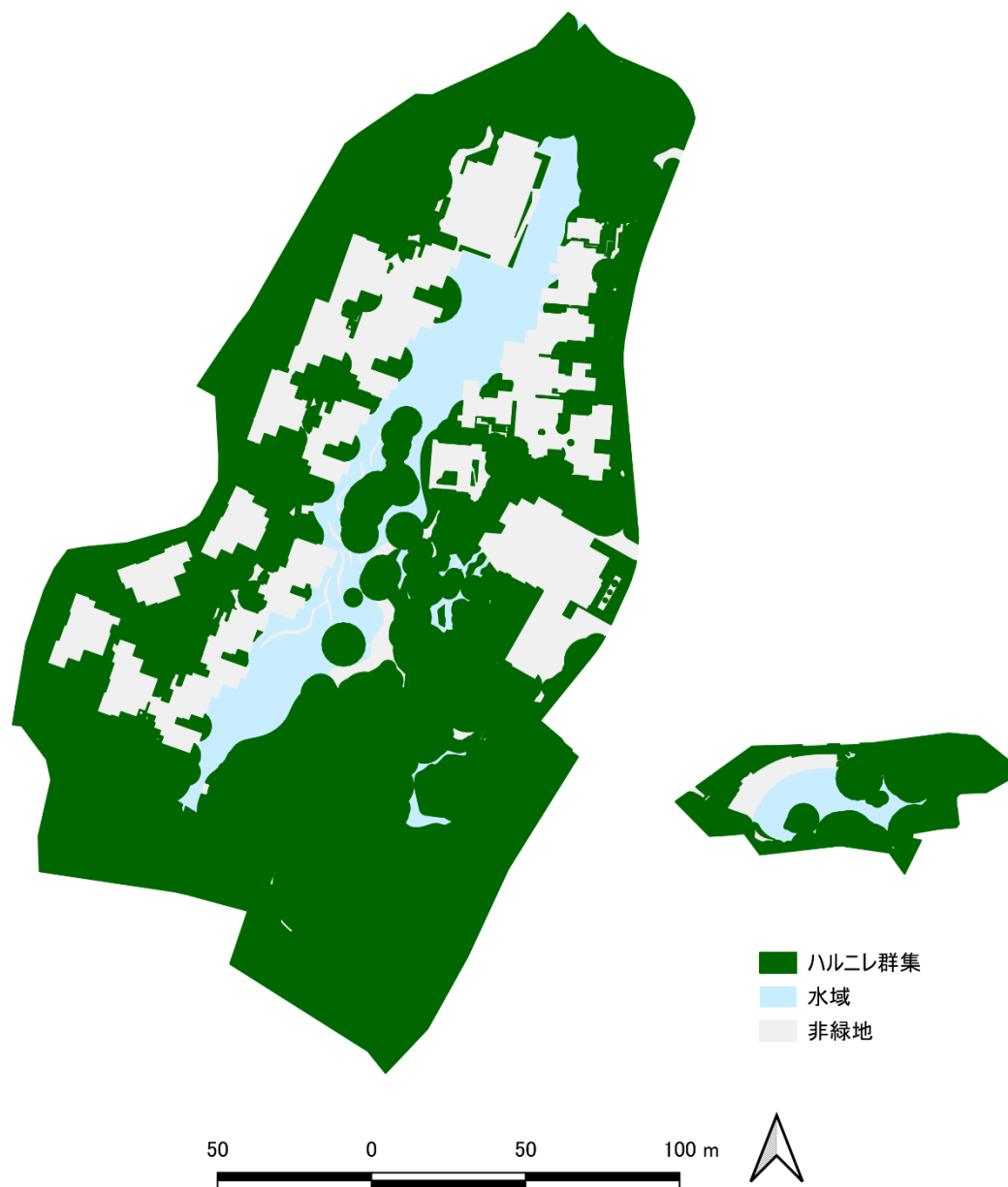


図. VEI 算出のための目標植生の分布

基準年と事業計画および設定された目標のそれぞれにおける環境タイプの面積割合を下図に示した。

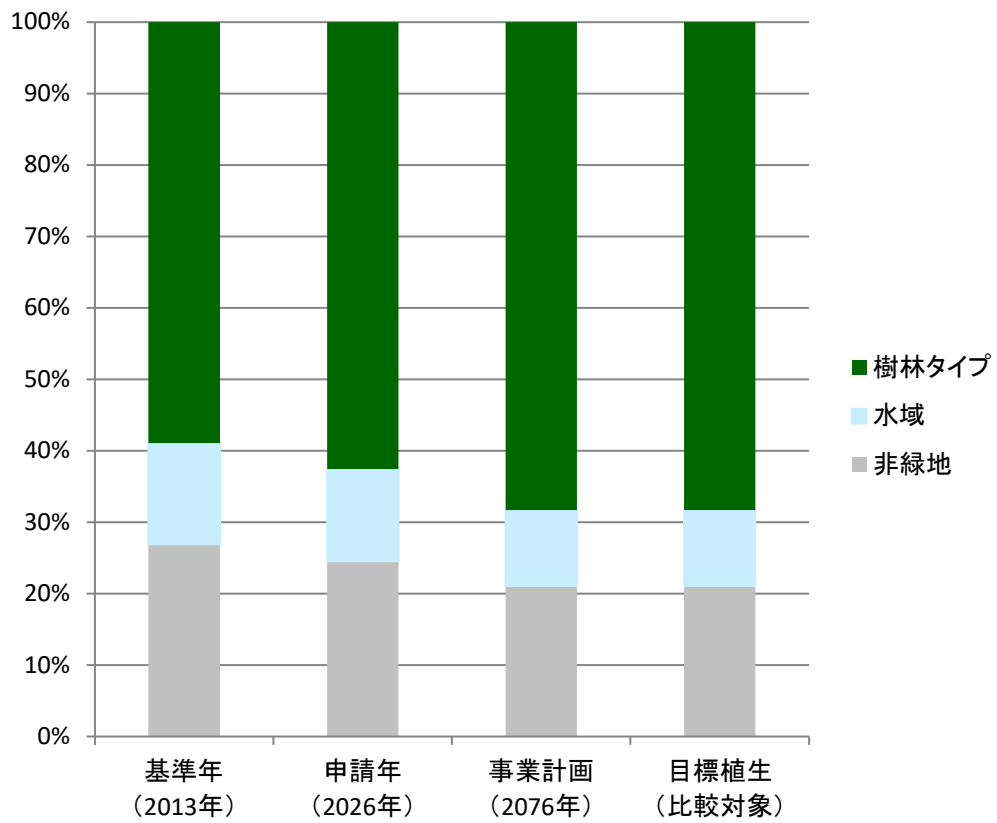


図. 環境タイプの面積割合

1-6.評価種の選定

(1) 選定プロセス

評価種は、樹林タイプについてハルニレ群集に生息する種を含む分類群の中から選定することとした。また、効率的に分析を進めるため、HSI モデルがすでに開発されている種、または十分な生態情報が存在する種を対象とした。その結果、哺乳類と鳥類、昆虫類（チョウ類）から選定することとした。

本事業の規模は約 4～5ha、区域の長径が約 350m であり、対応する行動圏クラスは 1～4 となる。哺乳類、鳥類、昆虫類（チョウ類）それぞれの中から、この行動圏クラスに該当する動物種を抽出した。

(2) 選定結果

樹林の評価種としては、哺乳類のニホンリス、鳥類のシロハラとシジュウカラ、昆虫類（チョウ類）のコミスジが選定された。

ニホンリス

本種は日本固有種で、新芽や花、果実、種子、キノコ類、昆虫類など多様な食物を利用している。中層、上層の樹種が豊富で、隠れやすい常緑高木が連続し、枝伝いに安全に移動できる環境を必要とするなど、森林の質や連続性を指標する種となりうる。



シロハラ

主に本州中部以南の積雪の少ない地方に渡来する冬鳥。地上をはね歩きながら、落ち葉をはねのけて、ミミズや昆虫などを食べる。秋には山地の林にすむが、冬には主に平地から山麓のよく茂った林に生息するとされる。樹林の中では、本種は草本層や低木層などの下層部を選好する。



シジュウカラ

本種は、低山帯から低地、樹林の多い公園や人家など、幅広い環境に生息する。都市域や工場地帯などにおいても比較的生息の可能性が高く、市民がさえずりを耳にする機会が多いと考えられる。昆虫類や液果などを食べる。



コミスジ

平地から低山地の林縁、またそれらが近接する緑の多い市街地で見られる。緑被量との相関が強く、スギやヒノキの人工林よりも広葉樹林を好むなど、良質な樹林の指標となりうる。



2. 植栽植物等の確認（要件 3 の確認）

本事業において植栽された植物種について、審査実施時点における生態系被害防止外来種リスト掲載種との照合を行い、同リストの掲載種が含まれないことを確認した。

3.評価基準値の算出

3-1.方法

評価基準値は、基準年（2013 年）から過去 30 年の間では、基準年が最も植生の成熟した状態であると推察された。このため、基準年時点におけるハビタット得点を 50 年間累積して求めた値を採用した。

1-2 における空中写真判読の結果、対象地における VEI（植生評価指数、植生の地域らしさ）および HSI（ハビタット評価指数、動物評価種のすみやすさ）を、以下のよう

(1) VEI

1-2 で判読した空中写真をもとに、植生を GIS データ化した。VEI の算出手順に従って、植生データを VEI に変換した（植生が存在しない区域の VEI は 0 点とした）。

(2) HSI

3-1 (1) で作成した植生データを、高さ（高木、亜高木、低木、地被）および葉の形状（広葉樹、針葉樹）の観点から整理した。それぞれの被度については、当協会が独自に取得したデータを参考にし、高木と亜高木については、HC1～2 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC3～4 層に該当する被覆部の被度を 40%、低木については、HC3 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC4 層に該当する被覆部の被度を 40%、地被については、HC4 層の被度を 80%とした。（ただし、芝草地は HC4 層の被度を 100%とした）

ハビタット変数をそれぞれの HSI モデルに入力し、HSI を求めた。得られた HSI を該当する環境タイプの面積比率で割った値を「該当する環境タイプにおける HSI (HSI_{hab})」とした。HSI_{hab} に 100 を乗じた値を「該当する環境タイプにおけるハビタット得点 (HShab)」とし、HShab に該当する環境タイプの面積比率を乗じたものを「ハビタット得点 (HS)」とした。

3-2.結果

評価種および植生ごとに、基準年（2013 年）時点におけるハビタット得点を 50 年間延長したものを下図に示した。

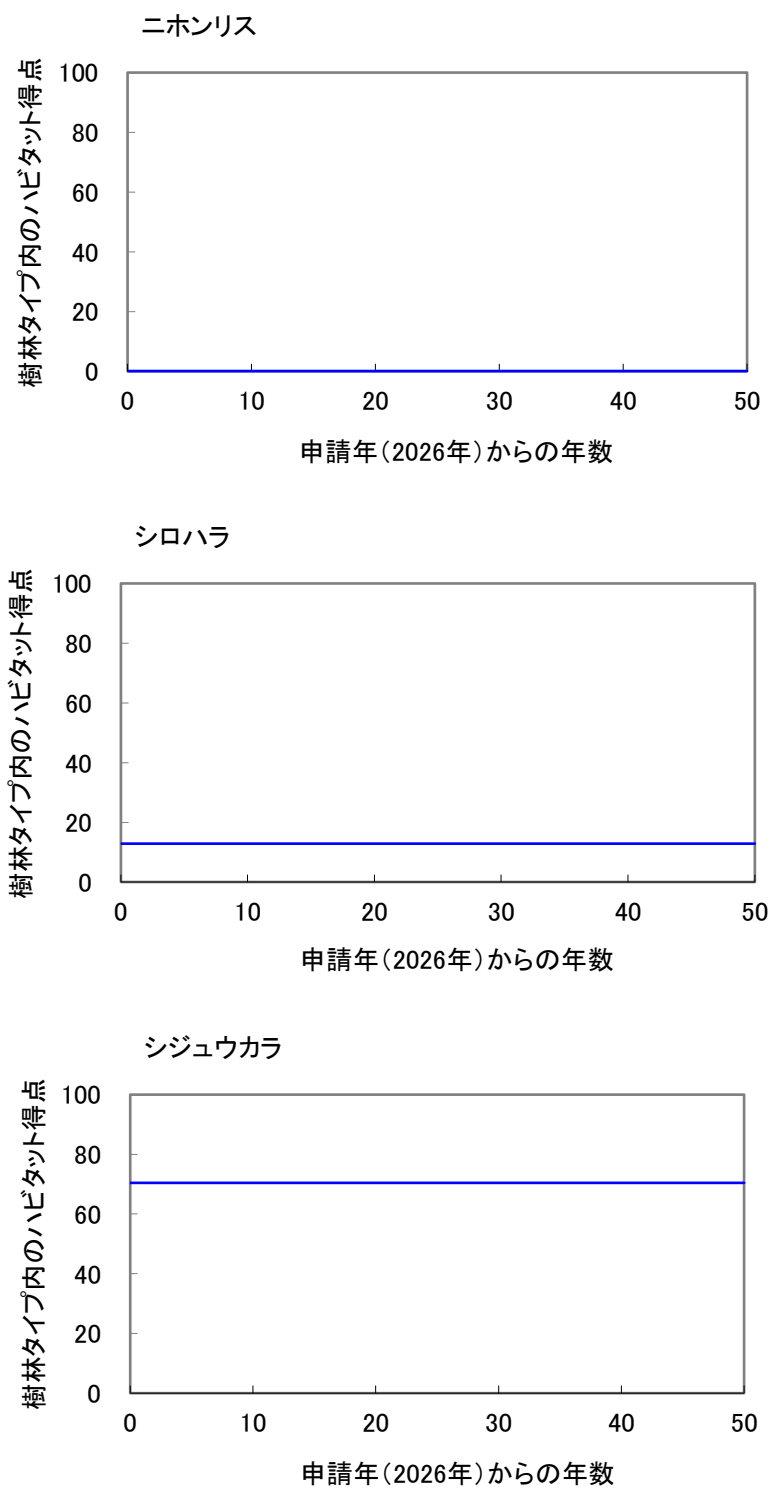


図. 評価種ごとの評価基準値

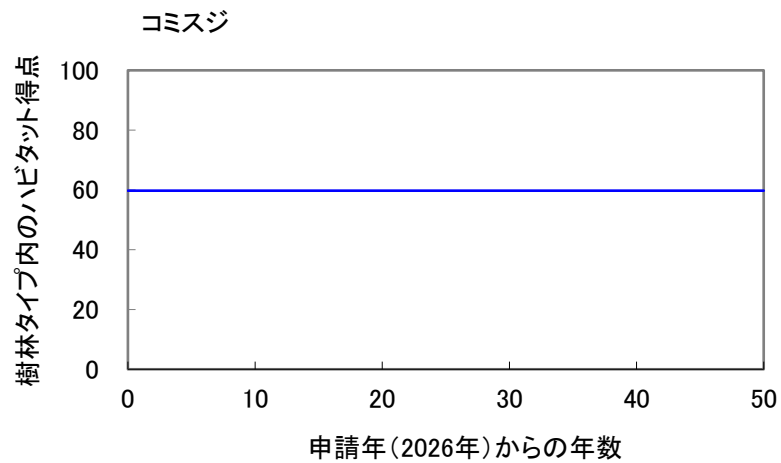


図. 評価種ごとの評価基準値

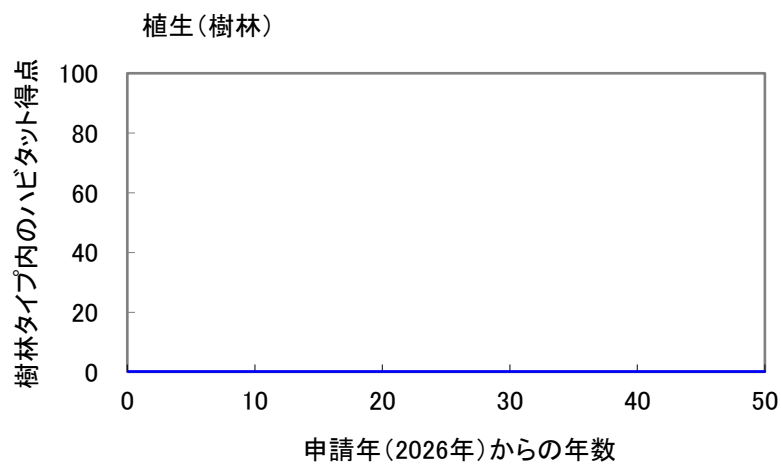


図. 植生の評価基準値

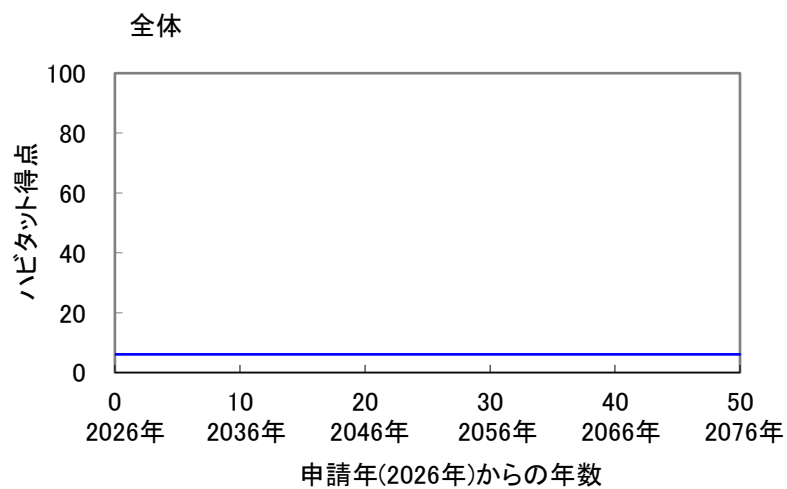


図. 全体での評価基準値

評価基準値を下表に示した。

表. 評価基準値

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.683	動物	ニホンリス	0.0	0.0
			シロハラ	12.9	8.8
			シジュウカラ	70.4	48.1
			コミスジ	59.7	40.8
			動物平均 F1	35.8	24.4
		植生 F2		0.2	0.1
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		18.0	12.3
非緑地	0.317			0.0	0.0
全体					12.3

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

4.事業によるハビタット得点の算出

4-1.方法

樹木の管理予定としては、一律に整枝・剪定を行うのではなく、低木・中高木ともに高さ制限を設けずに成長させていくものとしている。

各植栽木の樹高および樹冠半径を、樹木の成長モデルから予測した。その結果、主要な植栽木は、2062年（申請年の36年後）前後に大半の植栽木が最大樹高に至り、その後もゆるやかに成長が続いていくと予測された。

以上より、2026年（申請年）、2062年（申請年の36年後）、2076年（申請年の50年後）の3時点のVEIおよびHSIを算出した。

(1) VEI

B1～K層に該当する植物種ごとの被度割合を算出し、VEIを求めた。評価区域全体のVEIは、相観植生ごとのVEIを面積で加重平均して求めた（植生が存在しない区域のVEIは0点とした）。

(2) HSI

各樹種の樹冠および地被類や低木類の植え込みをGIS上に図化し、HC1～HC4層の各階層における被覆割合を算出した。階層ごとの植物被度は、当協会が独自に取得したデータを参考に被覆割合の80%とした。ただし、低木・地被類のHC3層の被度については、植栽区画ごとに植物高0.5m以上の植栽被覆割合の80%とし、芝草地はHC4層の被度を100%とした。

4-2.結果

得られた HSI と VEI に 100 を乗じて、各時期におけるハビタット得点を求めた。その推移を下图に示した。

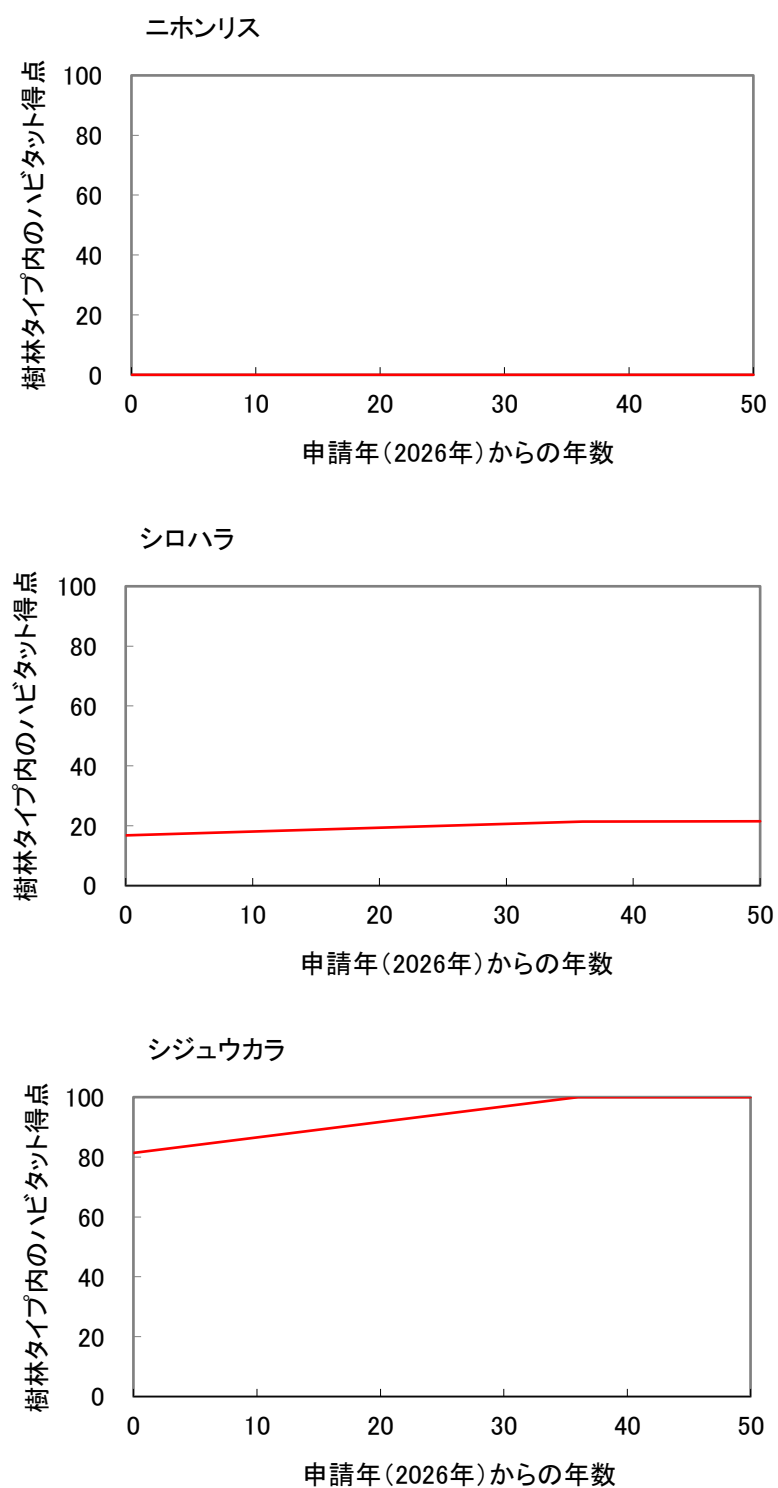


図. 事業により得られる評価種ごとのハビタット得点の推移

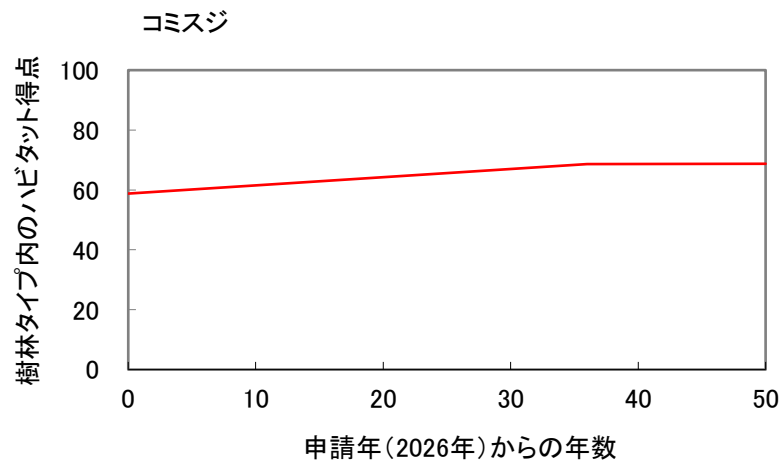


図. 事業により得られる評価種ごとのハビタット得点の推移

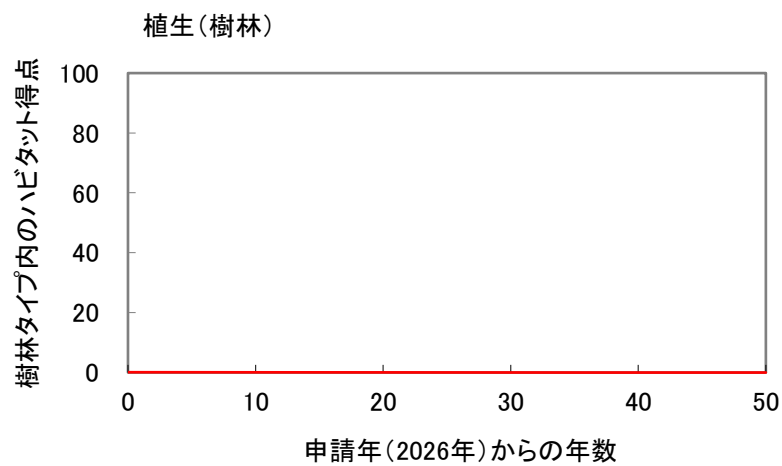


図. 事業により得られる植生ごとのハビタット得点の推移

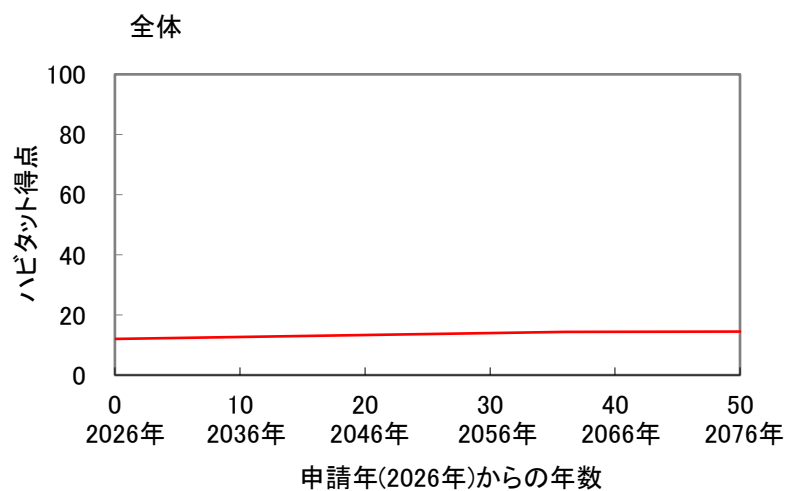


図. 事業により得られる全体でのハビタット得点の推移

本事業により得られると予想された年平均ハビタット得点を下表に示した。

表. 事業により得られる年平均ハビタット得点^{††}

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.683	動物	ニホンリス	0.0	0.0
			シロハラ	19.8	13.5
			シジュウカラ	93.3	63.7
			コムスジ	65.1	44.5
			動物平均 F1	44.5	30.4
		植生 F2		0.0	0.0
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		22.3	15.2
非緑地	0.317			0.0	0.0
全体					15.2

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

†† ニホンリスの評価値 (HSI) について

主食・貯食源となる樹木割合 (食物 SI1) を最低値で判定するモデル構造 (ボトルネック式) を採用していることに伴い、HSI スコアが「0」となっているが、これは区域内における巣場所の適性や季節的な食物利用、および周辺森林を含めた生態系ネットワーク上の実情を否定するものではない。

5.申請年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）

申請年（2026 年）の 50 年後における HSI と VEI に 100 を乗じて、各評価種と植生のハビタット得点を求め、下表に整理した。

表. 50 年後のハビタット得点**

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内のハビタット得点	ハビタット得点*
樹林	0.683	動物	ニホンリス	0.0	0.0
			シロハラ	21.5	14.7
			シジュウカラ	100.0	68.3
			コミスジ	68.7	47.0
			動物平均 F1	47.6	32.5
		植生 F2		0.0	0.0
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		23.8	16.2
非緑地	0.317			0.0	0.0
全体					16.2

* 環境タイプ内のハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

ニホンリスの評価値（HSI）について

主食・貯食源となる樹木割合（食物 SI1）を最低値で判定するモデル構造（ボトルネック式）を採用していることに伴い、HSI スコアが「0」となっているが、これは区域内における巣場所の適性や季節的な食物利用、および周辺森林を含めた生態系ネットワーク上の実情を否定するものではない。

6.評価値（要件 1 の確認）

4で求めた事業により得られる年平均ハビタット得点から、3で求めた評価基準値を引くと、評価値は以下の通りとなった。

表. 評価結果^{§ §}

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	評価値*
樹林	0.683	動物	ニホンリス	0.0
			シロハラ	+4.7
			シジュウカラ	+15.7
			コミスジ	+3.7
			動物平均 F1	+6.0
		植生 F2		-0.1
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		+2.9
非緑地	0.317			0.0
全体				+2.9

* 事業により得られる年平均ハビタット得点から評価基準値を引いた値

* 表の値には小数点第2以下の数値を反映

§§ ニホンリスの評価値（HSI）について

主食・貯食源となる樹木割合（食物 SI1）を最低値で判定するモデル構造（ボトルネック式）を採用していることに伴い、HSI スコアが「0」となっているが、これは区域内における巣場所の適性や季節的な食物利用、および周辺森林を含めた生態系ネットワーク上の実情を否定するものではない。

評価種および植生ごとに、評価基準値（青色）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

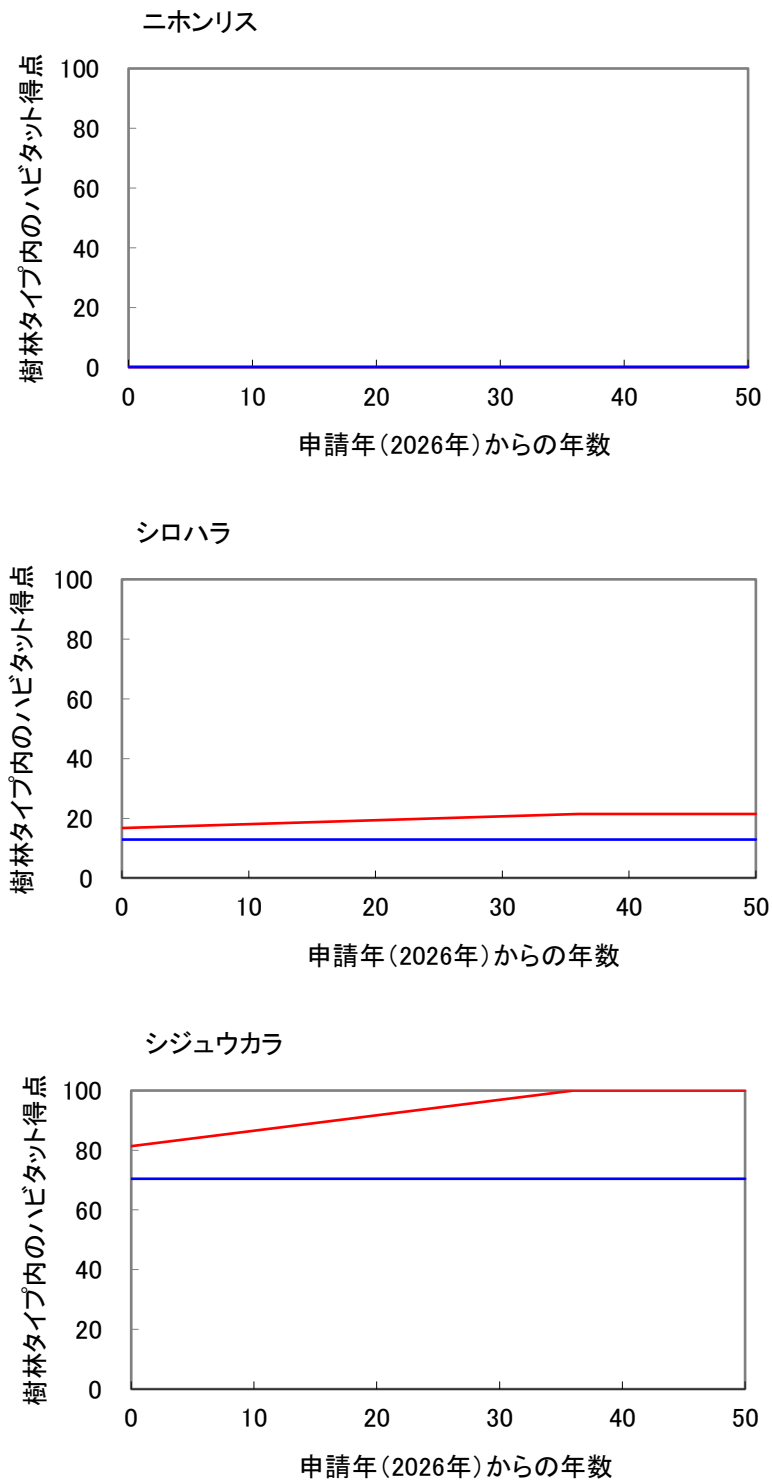


図. 評価種ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

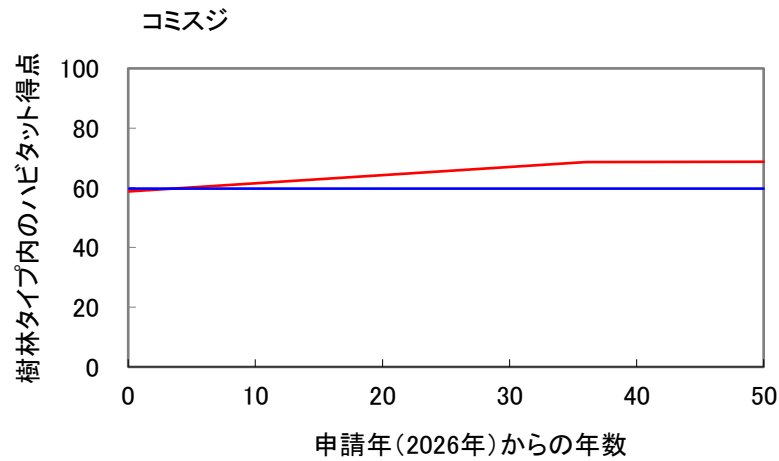


図. 評価種ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

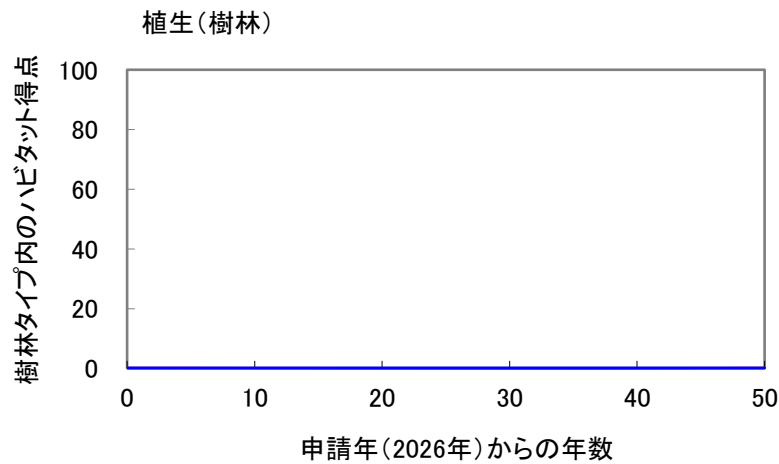


図. 植生の評価基準値とハビタット得点の推移

全体における評価基準値（青線）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

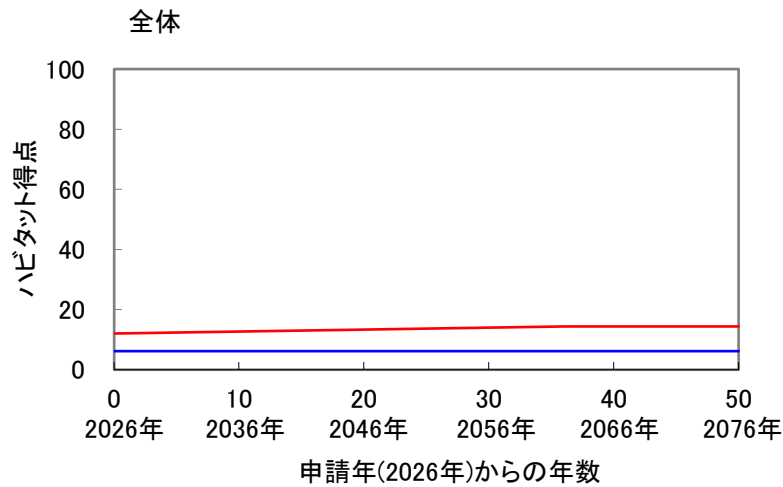


図. 全体での評価基準値とハビタット得点の推移

V. 審査結果

IV章の結果に従い、認証要件ごとの結果を以下に整理する。

要件 1（ノーネットロス要件）

事業で得られる年平均ハビタット得点が評価基準値以上となる。

本事業により得られる年平均ハビタット得点は、評価基準値（12.3 点）を 2.9 点上回った。このため、本事業は要件 1 を満たすものと認める。

要件 2（ハビタットの質要件）

ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。なお、条件によっては、他のサイトにおいて得られた評価値の一部またはすべてを、評価対象事業に移転すること（オフサイト代償）で、本要件を満たすことも可能である。

申請年（2026 年）の 50 年後におけるハビタット得点は 16.2 点と予測された。このため、本事業は要件 2 を満たすものと認める。

要件 3（外来種要件）

生態系被害防止外来種を使用しない。

本事業において植栽された植物種について、審査実施時点における生態系被害防止外来種リスト掲載種との照合を行い、同リストの掲載種が含まれないことを確認した。

このため、本事業は要件 3 を満たすものと認める。

認証の可否と認証種別および評価ランク

以上より、本申請事業は認証要件をすべてクリアし、JHEP 認証事業に該当することを認める。保全タイプと評価ランクは以下の通りである。

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク A

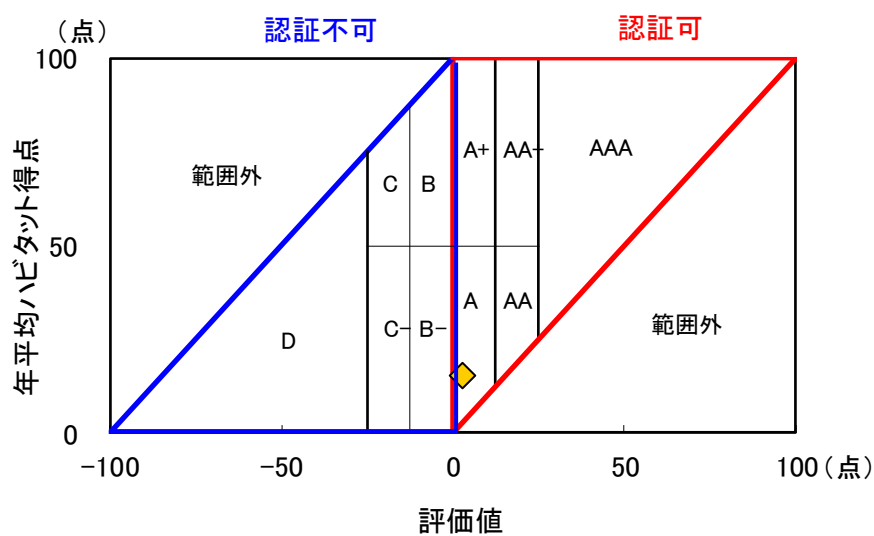


図. 本事業の評価ランク

※本事業は、横軸（評価値）が 2.9 点、縦軸（年平均ハビタット得点）が 15.2 点となる座標に位置する。このため、評価ランクは A に相当する。

星のや軽井沢・ピッキオビジターセンター
に対する JHEP 認証審査レポート

2026 年 9 月発行

編集 公益財団法人日本生態系協会

発行 公益財団法人日本生態系協会

〒171-0021

東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

電話 03-5951-0244

URL www.ecosys.or.jp/

* 禁無断転載・複製

© (公財)日本生態系協会 2026